OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって（5）
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 1999, 20, p. 289-309
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79794
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって(5)

竹　田　　新

On Chapters III～VI of Mas'ûdî's *Meadows of Gold*(5)

TAKEDA, Shin

Ⅶ（第六章の翻訳）

第6章　キリストとムハンマドとの間の時期の人々

（§122）マスウーディーは言った(1)。キリストとムハンマドとの間の時期には、一神教徒や復活を認める者が多数いた(2)。人々は彼らに関して意見を異にし、預言者たちが含まれていると考えた人もおれば、そうでないと考えた人もいる(3)。預言者と言われた者の中には、ハンザラ・ブン・サフワーン(Hanzala b. Safwân、サフワーンの子ハンザラ)がいる。彼はアッラーの友アブラハムの子イシュマエルの子孫の一人で、'ラッス(ar－Rass)のともがら'のもとに遣わされた(4)。'ラッスのともがら'はイシュマエルの子孫に属し、一方がカドマーン(Qadmân)、他方がヤーミン(Yâmin)あるいはラアウィール(Ra'wîl)と呼ばれる二つの部族からなり、イエメンに住んでいた(5)。ハンザラ・ブン・サフワーンは彼らの中でアッラーの御命令を実行したところ、彼らに殺されてしまった(6)。

（§123）そこでアッラーはイスラエル人のユダ支族に属する一人の預言者に啓示を下し給うた(7)。その啓示とは彼がネブカドネッツァル(アル＝ブフト・ナッサル)に、彼らのもとに進むよう命令することであった。そこでネブカドネッツァルは彼らのところに進み、彼らを滅ぼした。そのことは、アッラーの御言葉“我らの威力を知ると、たちまち彼らは逃走した”から、“ついに我らは刈り入れの穀物のようにして彼らを絶滅させた”までに見られる(8)。この民はヒムヤル(Himyar)に属したと言われ、彼らの詩人の一人が上のことを彼らへの哀歌の中で述べている(9)。

私の眼はラッスの民、ラアウィールとカドマーンのために涙で溢れた。

カハターン(Qahtân)族の懲罰は、アブー・ダルア(Abû Dar')よりはましである(10)。

（§124）ワハブ・ブン・ムナッビフ(Wahb b. Munabbih、ムナッビフの子ワハブ)からの話として、次のような叙述がある(11)。ズー・アル＝カルナイン(Dhû 'l－Qarnayn)、すなわちアレクサンドロス(al－Iskandar)はキリストの後のこの過渡期にいた(12)。そして、彼が太陽に近付いてその東と西の両先端をつかむという夢を見て、彼の民に自分の夢を語ると、彼らは彼をズー・

アル＝カルナイン(両先端の持主)と呼んだというのである(13)。人々の間には、ズー・アル＝カルナインをめぐって多くの論争があったが、我らは『時代の情報の書』及び『中間の書』の中でそれらについて既に述べている(14)。そして[本書で]ギリシア人諸王とビザンツ人(アッ＝ルーム)諸王について述べる際に、ズー・アル＝カルナインの話を略述するであろう(15)。

(§125)‘洞窟の人々’がどの時代にいたのかをめぐっても、人々の間に論争があった(16)。この過渡期にいたと主張した人もいれば、そうではないと考えた人もいる(17)。我々は本書でビザンツ人諸王のことを述べる際に、‘洞窟の人々’の話を略述するであろう(18)。尤も、我々は『中間の書』やそれに先立つ『時代の情報の書』の中でそれらについて既に述べてはいる。

(§126) キリストの後、この過渡期にいた者の中には、ゲオルギウス(Jirjīs)がいる(19)。彼は[12]使徒の何名かと同時代に生きていた。アッラーは彼をモースルの或る王のもとに遣わし、彼はこの王にアッラーを信じるよう説いた(20)。ところが王は彼を殺してしまった。そこでアッラーは彼を蘇らせ、再び王のところに送った。すると王が彼を殺したので、アッラーが彼を蘇らせたところ、王は三たび、彼を挽いて燃やしてティグリスに投げ捨てるよう命じた。そこでアッラーはこの王と王に従う王国の全住民とを滅ぼし給うた(21)。これは[アッラーを]信じる啓典の民を通して伝えられたところによっており、ワハブ・ブン・ムナッビフなどによる創始と伝記の諸書に見いだされる(22)。

(§127) この過渡期にいた者の中には、‘大工のハビーブ(Habīb)’がいる(23)。彼はシリア(アッ＝シャーム)の地のアンティオキア(Antākīya)の町に住んでいた。当地には偶像や画像を崇める高慢な王がいた。そこで、キリストの弟子たちの2名がこの王のもとに赴き、王にアッラーを信じるよう説いた(24)。すると王は二人を牢にぶち込み、彼らを打ちすえた。そこでアッラーは“3人目を送って”二人を強くし給うた(25)。この3人目に関しては論争があった。多くの人々は彼はペテロ(Butrus)であると考えた。ペテロとはラテン語(ar－Rūmīya)における彼の名であり、アラビア語では彼の名はシメオン(Sim‘ān)、シリア語(as－Siryânîya)では、‘清純さのシメオン(Shim‘ūn)’である。そして[他の]多くの人々と、キリスト教の全宗派は、補強された3人目はパウロ(Būlus)であり、牢獄につながれた、前の二人はトーマス(Tūmā)とペテロであると考えた(26)。彼らとこの王との間には長い話があったが、それは彼らが癩患者や盲人を癒したこと、死人を甦らせたこと、パウロが策略を用いて王に取り入り、王と親しくなって仲間二人を牢獄から救い出したことという、彼らの示した奇跡や証しに関するものであった(27)。

(§128) そこで‘大工ハビーブ’はやって来て、彼が見たアッラーの幾つかの御徴のゆえに、彼らを正しいとみなした(28)。アッラーはこうした彼らのことを御啓典の中で、「我らが彼らのもとに二人を遣わしたところ、彼らは二人を嘘つき呼ばわりした。そこで我らは3人目を送って二人を強くした」から「一人の男が走って来る」という御言葉によって告げ給うている(29)。パウロとペテロはローマ(Rūmīya)の町で殺され、十字架に逆さづりされた。二人には、この町において王や魔術師シモン(Sīmā)との間で長い話があった。その後、二人は水晶製の柩に安置さ

れたが、それはキリスト教の出現後のことであり、二人の聖墓はこの町の教会にある(30)。我らはこうしたことを既に『中間の書』の中で述べている。それはローマの不思議な事柄や、キリストの弟子たちの話、諸国への彼らの分散の話を叙述した際であるが、本書の中でも彼らの話を略述するであろう(31)。

（§129）'坑のともがら'と言えば、彼らはこの過渡期にズー・ヌワース(Dhū Nuwās)の統治下、イエメンのナジュラーン(Najrān)の町にいた(32)。彼はズー・シャナーティル(Dhū Shanātir)を殺した者であり、ユダヤ教を信仰していた(33)。ナジュラーンの民がキリスト教を信仰していることがズー・ヌワースに伝わると、彼は自ら彼らのもとに進み、彼ら用に坑を幾つか地に掘り、それらを炭で満たして火を点けた(34)。その後、彼らにユダヤ教を示し、彼に従った者は放免し、拒んだ者はその火の中に投げ込んだ。7か月の息子を連れた女性が連れて来られたが、彼女は自分の宗教を捨てることを拒んだ。すると火に近付けられ、彼女に戦慄が走った。そこでアッラーはその子に口を利かせ給い、その子は言った「お母さん、あなたの宗教を守りなさい。この後には火はないのですから」(35)。するとズー・ヌワースは二人を火の中に投げ込んだ(36)。彼らは今日のキリスト教ではなく、一神教の信者であった。

（§130）彼らのうちの一人で、ズー・サアラバーン(Dhū Tha'labān)と呼ばれる男が救援を求めて、ビザンツ人の王カエサル(Qaysar)のもとに赴いた(37)。するとカエサルはその男のためにネグス(an－Najāshī、アビシニア王)宛に手紙を書いた。なぜならネグスの方が彼らにより近い所に住んでいたからである。その結果、アビシニア人(al－Habasha)がイエメンの地に渡って、その地を制圧してから、サイフ・ブン・ズー・ヤザン(Sayf b. Dhī Yazan)が諸王に助けを求め、アヌーシルヴァーン(Anūshirwān)が彼を救い出すまで、我らが『時代の情報』と『中間の書』の中で既に述べていることが起こった(38)。我らはそれらについて、本書でも今後、ズーたち(al－Adhwā')とイエメンの王たちの話を述べる際に、アッラーが望み給うならば、しかるべき場所で略述するであろう(39)。アッラーは御啓典の中で「坑のともがらは殺された」から「力強いお方、称えるべきお方」に至る御言葉によって、この'坑のともがら'の話を述べ給うている(40)。

（§131）この過渡期にいた者の中には、ハーリド・ブン・スィナーン・アル＝アブスィー(Khālid b. Sinān al－'Absī、アブス族のスィナーンの子ハーリド)がいる。ハーリド・ブン・スィナーン・ブン・ガイス・ブン・アブス(Khālid b. Sinān b. Ghayth b. 'Abs、アブスの子ガイスの子スィナーンの子ハーリド)のことであり、聖預言者はこの人物のことを述べ、「あの人はあの人の民が失った預言者です」と言った(41)。ことの次第は以下のようである。アラブ人の間に或る火が現われ、彼らはその火に魅了された。火は次々と移って行き、アラブ人はもう少しで拝火教徒となって、拝火教が彼らを支配せんばかりであった。ハーリドは棒を取り、「至高なるアッラーへと導く正道はすべて現れているのです。必ずや、私は燃え盛る火の中に入って、私の衣服が露に濡れた状態で火の中から出て来ますぞ」と言いながら火に入り、その火を消した

(42)。ハーリドに死が訪れた時、彼は兄弟たちに、「私が埋められた時、切り尾のろばが先導する野生のろばの群れがやって来て、先導のろばがひずめで私の墓を打つでしょう。あなたがたはそれを見たら、私を掘り返しなさい。私は出て来て、<死後に>存在すること<と、冥府と墓の状態>を全てあなたがたに知らせるでしょう」と言った(43)。

(§132) そして彼が死に、兄弟たちが彼を埋めた時、彼らは彼が言った通りのことを見て、彼を掘り出そうとしたが、一部の者がそのことを嫌い、「我々は自分たちのために死人を掘り返したとアラブ人に罵られるのが怖い」と言った(44)。ハーリドの娘はアッラーの使徒のもとに来て、この使徒が「言え、これぞアッラーにして唯一者、アッラーにして永遠なる者」と読誦するのを聞くと、「父がこう言ったものでした」と言った(45)。我らは本書の来るべき箇所で、ハーリドの話で述べる必要のあるものを略述するであろう(46)。

(§133) マスウーディーは言った。この過渡期にいた者の中には、リアーブ・アッ=シャンニー(Ri'āb ash-Shannî、シャンヌ族のリアーブ)がいる。彼はアブド・カイス('Abd Qays)部族の、シャンヌ(Shann)氏族に属していた(47)。そしてアッラーの使徒が遣わされる前、キリスト教を信仰していた(48)。人々は聖預言者が遣わされる前、「地上で最良の者は3人、すなわち、リアーブ・アッ=シャンニーと、修道士バヒーラー(Bahîrâ)と、まだやって来ていないもう一人の男である」と天から叫ぶ声を聞いた(49)。このもう一人の男とは聖預言者のことである(50)。リアーブの子孫の誰かが死んで埋められると、人々はその者の墓の上に露を見るのが常であった(51)。

(§134) 彼ら(=この過渡期の者)の中には、アスアド・アブー・カリブ・アル=ヒムヤリー(As'ad Abû Karib al-Himyarî、ヒムヤル族のアスアド・アブー・カリブ)がいる。彼は真の信仰を持ち、聖預言者が遣わされる700年も前に、この預言者を信じていた(52)。彼は言った。

私はアフマド(Ahmad)に対して、彼が '息の創造主' アッラーからの使徒であることを証言します。

もしも私の生きている期間が彼の生きている時まで延ばされたならば、私は彼の宰相となり、彼の父方の従兄弟となるでしょう。

私はアラブ人も非アラブ人('ajam)も、地上の者全てを彼に従わせるでしょう(53)。

また、彼はカアバを厚布と縞模様の布で覆った最初の者である。それゆえ、ヒムヤル族のある者が言う。

我々はアッラーが不可侵となし給うた御館を刺繍された覆いと縞模様の布地とで覆った(54)。

(§135) 彼らの中には、イヤード・ブン・ニザール・ブン・マアッド(Iyâd b. Nizâr b. Ma'add、マアッドの子ニザールの子イヤード)の子孫の、クッス・ブン・サーイダ・アル=イヤーディー(Quss b. Sâ'ida al-Iyâdî、イヤード族のサーイダの子クッス)がいる(55)。彼はアラブ人の裁き人であり、復活を認めていた(56)。彼は「生きた者は死に、死んだ者は過ぎ去るのです。来るべきことは全て来るのです」と言っている人物である。アラブ人は彼の知恵と知識を諺にした(57)。アル=アアシャー(al-A'shâ)は言っている(58)。

クッスよりも賢い、そして、ハッファーン(Khaffân)の茂みを持ち、吹く風で見えなくなったそれ(＝ライオン)よりも大胆な[59]

（§136）イヤード族の代表団が聖預言者のもとに到着した[60]。そこで彼がクッスについて彼らに尋ねたところ、彼らが「あの者は亡くなりました」と言ったので、彼は言った「アッラーがあの方に御慈悲を垂れ給いますように。あの方がウカーズ('Ukâz)の市場で、御自分の赤毛の駱駝に乗って、『皆さん、集まって、よく聞き、心に留めておいてください。生きた者は死に、死んだ者は過ぎ去ります。そして来るべきことは全て来るのです。天には知らせがあり、地には教訓があります。膨れる海、沈む星、持ち上げられる屋根(＝天)、広げられる寝床(＝地)を見なさい。私はアッラーに誓って言いますが、アッラーはあなた方が信じている宗教よりも満足を与える宗教をお持ちなのです。なぜ、人々は行って戻らないのでしょうか。満足し、留まっているのでしょうか。それとも、捨てられ、眠っているのでしょうか。道は同じですが、行ないは異なっているのです』と言っているのが、目に浮かびます。あの方は詩を何行か、私は覚えていないのですが、歌いました」[61]。

（§137）するとアブー・バクル・アッ＝スィッディーク(Abû Bakr as－Siddîq)が立ち上がり、「アッラーの使徒よ、私はそれらを覚えています」と言った[62]。そこで預言者が「言いなさい」と言うと、アブー・バクルは言った[63]。

最初の時代にいた過ぎ去った人々の中に、我々は教訓をみる。
私は死に至る、出口のない道を見た時、
私は私の民が老いも若きもその道の方へ進み、
過去の者が戻らず、残っている者も一人として残らないのを見た時、
私はこの民が至った所に私自身も疑いなく至ることを確信した[64]。

アッラーの使徒は言った「アッラーがクッスさんに御慈悲を垂れ給いますように。私はアッラーがあの方を一人だけで一つのウンマ(共同体)として復活させ給うことを切に望みます」[65]。マスウーディーは言った。クッスには多数の詩や、警句、医術と鳥占いと占いに関する考察すべき話、様々な格言があり、我らは我らの書『時代の情報』と『中間の書』の中でそれらを述べた[66]。

（§138）この過渡期にいた者の中には、ザイド・ブン・アムル・ブン・ヌファイル(Zayd b. 'Amr b. Nufayl、ヌファイルの子アムルの子ザイド)がいる。彼は[天国を約束された]かの10人の一人サイード・ブン・ザイド(Sa'îd b. Zayd、ザイドの子サイード)の父で、ウマル・ブン・アル＝ハッターブ('Umar b. al－Khattâb、アル＝ハッターブの子ウマル)の父方の本いとこである[67]。ザイドは偶像崇拝を嫌い、これを非難していた。ザイドの父方のおじアル＝ハッターブはメッカの愚かな者たちをザイドに対してけしかけ、彼らにザイドの処分を任せた。そこで彼らはザイドに危害を加えたので、ザイドはヒラー(Hirâ')にある洞窟に住み、密かにメッカに入ってくるのであった[68]。そして彼はシリアに行き、[真の]宗教を探したが、キリスト教徒たちに

毒を盛られ、シリアで死んだ(69)。彼には王や通訳との、そしてダマスカスのガッサーン(Ghassān)朝の王たちとの長い話があり、我らは先に著した書物の中でその話を述べた(70)。

(§139) 彼らの中には、ウマイヤ・ブン・アブー・アッ＝サルト・アッ＝サカフィー(Umayya b. Abī as−Salt ath−Thaqafī、サキーフ族のアブー・アッ＝サルトの子ウマイヤ)がいる。彼は聡明な詩人であった。シリアへ商売に行き、ユダヤ教徒とキリスト教徒の教会関係者と会い、諸啓典を読んでいた。そして、一人の預言者がアラブ人に遣わされるであろうことを既に知っていた(71)。彼は宗教関係者の意見に基づく詩を歌い、諸天、地、太陽、太陰、諸天使、諸預言者を描写し、復活、蘇り、楽園、業火を述べ、以下の言にあるようにアッラーだけを称賛していたのである(72)。

アッラーに称賛あれ、かれにはいかなる共同者もない。これを言わない者は自身を損なっている。

また、彼は言葉の中で楽園の住人を描写して言った。

そこ(＝楽園)では無駄話も悪事も一切ない。彼らが口に出したことは彼らのためにずっと残る(73)。

(§140) 聖預言者の出現したことがウマイヤの耳に届いた時、ウマイヤはそのことに腹立たしさと悔しさを感じ、ムスリムになるためにメディナにやって来たが、妬み心に押し戻され、ターイフ(at−Tā'if)に帰ってしまった(74)。彼がある日、若者たちと飲んでいると、1羽の鳥が降り立ち、三声鳴いて飛び去った(75)。そこでウマイヤは「お前たちは鳥が言ったことを知っているか」と言った。彼らが「いいえ」と言うと、彼は「鳥が言うには、ウマイヤは3杯目を飲み干す前に死ぬ」と言った(76)。すると人々は「我々は鳥の言ったことを決して信じません」と言った。彼が「お前たちの杯を少しずつ啜れ」と言うと、彼らは杯を少しずつ啜った。ウマイヤは3杯目になった時、気絶し、長い間沈黙した(77)。その後、彼は次のように言いながら、意識を回復した。

お二人の前におります。お二人の前におります。ほら、私はここ、御前におります。

私は御恩寵に包まれたのに、感謝に努めなかった者です。

アッラーよ、お赦し下さるのなら、全てをお赦し下さい。あなたのしもべの誰が過ちを犯していないでしょうか(78)。

(§141) それから、彼は「私は恩寵と称賛に包まれたのに、感謝に努めなかった者です」と言った後、次のように言い始めた(79)。

まことに決算の日は凄い日である　　小さい者も長い白髪を持った老人になる。

その日が私に現れる前にしておればよかったのだが　　山々の頂で山羊を飼うことを。

いかなる生も、たとえ一時長らえたとしても　　消え去るまでしばし続くに過ぎない(80)。

それから喉を鳴らし、息を引き取った(81)。

(§142) マスウーディーは言った。人々の[戦争の]日々と先人たちの話とを知っている者たち

の一群、すなわちイブン・ダアブ(Ibn Da'b)、アル＝ハイサム・ブン・アディー(al－Haytham b. 'Adî)、アブー・ミフナフ・ルート・ブン・ヤフヤー(Abû Mikhnaf Lût b. Yahyâ)、ムハンマド・ブン・アッ＝サーイブ(Muhammad b. as－Sâ'ib)といった者たちは、クライシュ(Quraysh)族の書き方、すなわち彼らの手紙の最初を“アッラーよ、汝の御名において”で始めることの由来を次のように述べた(82)。ウマイヤ・ブン・アブー・アッ＝サルト・アッ＝サカフィーがサキーフ(Thaqîf)族とクライシュ族の一団からなる隊商でシリアへ出かけた(83)。彼らは旅から戻って来た時、或る休憩地で止まり、食事のために集まった。その時、小さな蛇がやって来て、彼らに近付いた。そこで誰かが蛇の顔に小石を投げたところ、蛇は戻って行った。彼らは旅の食糧の袋を締め、立ち上がって駱駝に鞍を付け、休憩地を後にした。ところが彼らが少し行くと、老婆が杖にもたれながら、砂丘から彼らを見下ろして、言った「お前さんたちのところに夕方やって来たあのかわいそうな小娘ラヒーマ(Rahîma)に、なんでお前さんたちは食べ物を恵んでやらなかったのかい」(84)。彼らは言った「お前さんは誰だね」。老婆は言った「ウンム・アル＝アウワーム (Umm al－'Awwâm)。何年も前に一人ぼっちになった者さ。しもべたち(＝人間)の主にかけて言っておくが、きっとお前さんたちは国で散り散りになるだろうね」。それから、杖で地面を打ち、砂を舞いあげて[杖に]言った「この者たちがなかなか帰郷できないように、この者たちの駱駝を威して追い払っておしまい」。するとどの駱駝の上にもサタンが乗っているかのように、駱駝どもは跳び上がり、我々には一頭も取り押さえることができないまま、とうとう駱駝どもは荒野に散ってしまった。我々は昼の終わりから翌朝までかかって、なんとか駱駝どもを集めた。そして駱駝どもを跪かせ、出発させようとした時、例の老婆が現われ、杖で最初の行為を繰り返し、「なんでお前さんたちは身寄りのない小娘ラヒーマに食べ物を恵んでやらなかったのかい。さあ、この者たちがなかなか帰郷できないようにし、この者たちの駱駝を威して追い払っておしまい」という言葉を再び発した。すると駱駝どもは逃げ去り、我々は一頭も取り押さえることができなかった。そこで我々は昼の終わりから翌朝までかかって、なんとか駱駝どもを集めた。ところが我々が駱駝どもを跪かせ、出発させようとした時、例の老婆が現われ、１回目と２回目にしたことを繰り返した。すると駱駝どもは脅えて逃げ去ったが、我々は自分たちの駱駝を諦めたまま、月夜を過ごしたのである(85)。それから、我々はウマイヤ・ブン・アブー・アッ＝サルトに言った「お前さんがわしらに言っていたお前さんの力とやらは、どこにいったのかい」。

（§143）そこでウマイヤは例の老婆がやって来た砂丘へと向かい、その砂丘を向う側へ降り、次いで別の砂丘に登り、降りた。するとランプの幾つかついている教会が現われ、頭とひげの白い人が座っていた。ウマイヤは言った「私がその人の前で立ち止まると、その人は私に顔を上げ、『おぬしはとりつかれておる』と言った。私が『その通りでございます』と言うと、その人は『おぬしにとりついているものは、いずこからやって来るのかな』と言った。私が『私の左の耳からでございます』と言うと、その人は『では、いかなる衣服をおぬしに命じるのかな』と言った。私が『黒でございます』と言うと、その人は『これはジンの常じゃ。おぬしは出来そうで出

来なかった。この事が出来るたぐいはその者に右の耳もとで話しかけ、大好きな衣服は白なのじゃ。何ゆえ、おぬしはやって来たのじゃ、おぬしの用事は何なのじゃ』と言った(86)。そこで私は例の老婆のことをその人に話した。するとその人は『あのばあさんの言ったことは合っているが、ばあさんは正直ではない。あのばあさんは何年も前に亭主を亡くしたユダヤ人なのじゃ。出来うるならば、おぬしたちを滅ぼすまで、おぬしたちに同じことをきっと続けるだろうよ』と言った」(87)。ウマイヤが「どうしたらよろしいのでございますか」と言うと、その人は「おぬしたちの駱駝を集めるのじゃ。ばあさんがおぬしたちのところにやって来て、前と同じことをしたなら、『アッラーよ、汝の御名において』と上から7回、下から7回言うのじゃ。ばあさんはおぬしたちに危害を加えることが決して出来ぬじゃろう」と言った。

(§144) ウマイヤは仲間たちのところに戻り、自分に言われたことを彼らに告げた。すると老婆がやって来て、前と同じことをした。そこで彼らは「アッラーよ、汝の御名において」と上から7回、下から7回言った。それで老婆は彼らに危害を加えることが出来なかった。老婆は駱駝どもが動かないのを見た時、「お前さんたちの仲間が分かったよ。その者はきっと上が白くなり、下が黒くなるだろうね」と言った。彼らは夜中に進んだが、朝になった時、ウマイヤを見ると、彼の両頬と首と胸が白皮症に罹り、下半身が黒くなっていた(88)。そして彼らはメッカに着いた時、この話を語った。そのため、メッカの住民の書き出しは、“アッラーよ、汝の御名において”となったのである。やがてイスラームが到来すると、その表現は取り去られ、“慈悲深く、慈悲あまねくアッラーの御名において”と書かれることになった(89)。ウマイヤには、我らが『時代の情報』や先に著したその他の書の中で既に述べている、この他の話がある。

(§145) 彼ら(=この過渡期にいた者たち)の中には、ワラカ・ブン・ナウファル・ブン・アサド・ブン・アブド・アル=ウッザー・ブン・クサイイ(Waraqa b. Nawfal b. Asad b. ʻAbd al-ʻUzzâ b. Qusayy、クサイイの子アブド・アル=ウッザーの子アサドの子ナウファルの子ワラカ)がいる。彼はフワイリド(Khuwaylid)の娘で、聖預言者の妻ハディージャ(Khadīja)の直系の父方のおじの子である(90)。彼は諸啓典を読み、学問を求め、偶像崇拝を嫌っていた。そしてハディージャに聖預言者の[到来という]吉報を伝え、その者がこのウンマの預言者であり、迫害されて嘘つき呼ばわりされるだろうことを伝えた(91)。ワラカは聖預言者に[その召命前に]会うと、「兄弟の子よ、お前が信じていることに確信を持て。ワラカの魂がその御手にあるお方(=アッラー)にかけて言うが、お前は確かにこのウンマの預言者であり、迫害を受け、嘘つき呼ばわりされ、[メッカから]追い出され、殺されようとする。もしもわしがお前の[召命の]日まで生きていたならば、わしはアッラーがご存じのようなやりかたでアッラーのお手伝いをするであろう」と言った(92)。ワラカに関しては意見が分かれ、彼はキリスト教徒として死に、聖預言者の出現まで生きていなかったので、彼にはそのこと(=聖預言者を助けること)が不可能であったと主張した者もいれば、彼はムスリムとして死に、聖預言者を褒めたたえて、以下のように言ったと考えた者もいる(93)。

その者は赦し、また赦し、悪で応じることはない。

罵られ怒りを感じた時も、怒りの爆発を押える。

（§146）彼らの中には、ウトバ・ブン・ラビーア（'Utba b. Rabî'a、ラビーアの子ウトバ）のマウラー（解放奴隷）であるアッダース（'Addâs）もいる(94)。彼はニネヴェの住民であったが、聖預言者にターイフで会った(95)。その時、この預言者は人々をアッラーに呼ぶために出かけてきたのであった(96)。そしてアッダースには、聖預言者との間で、庭園における話があった(97)。アッダースはキリスト教徒のまま、バドル（Badr）の日に殺されたが、聖預言者の[到来という]吉報を伝えた者の一人であった(98)。

（§147）彼らの中には、ナッジャール族（Banû n－Najjâr）に属するアンサール（援助者たち）の一人、アブー・カイス・スィルマ・ブン・アブー・アナス（Abû Qays Sirma b. Abî Anas、アブー・アナスの子アブー・カイス・スィルマ）もいる(99)。彼は修道士になって、毛衣を纏い、偶像を避けていた(100)。そして或る家屋に入り、そこを月経中の者や汚れている者は入れない礼拝所とし、「私はアブラハムの主を崇めます」と言っていた。聖預言者がメディナにやって来た時、アブー・カイスはムスリムになったが、彼のイスラームはすばらしいものであった(101)。彼のことで、"また、夜明けになって白糸と黒糸が見分けられるようになるまで、食べて飲め"云々というサフール（sahûr）の節が下った(102)。また、彼は聖預言者について次のように言った者である(103)。

その方は慰めとなる友人に会えたらなあと説教しながら、10余年クライシュ[部族]の中に留まった(104)。

（§148）彼らの中には、アブー・アーミル・アル＝アウスィー（Abû 'Âmir al－Awsî、アウス族のアブー・アーミル）もいる。彼の名前はアブド・アムル・ブン・サイフィー・ブン・アン＝ヌアマーン（'Abd 'Amr b. Sayfî b. an－Nu'mân、アン＝ヌアマーンの子サイフィーの子アブド・アムル）で、彼はアウス部族（al－Aws）のアムル・ブン・アウフ支族（Banû 'Amr b. 'Awf、アウフの子アムル族）に属する(105)。そして、ガスィール・アル＝マラーイカ（Ghasîl al－Malâ'ika）と呼ばれるハンザラの父親に当たり、敬虔な人物で、ジャーヒリーヤ（無道）時代に修道士となり、毛衣を纏っていた(106)。聖預言者がメディナにやって来た時、彼と聖預言者との間には、長い話があったが、彼は50名の若者を率いて[メディナを]出て行き、シリアでキリスト教徒として死んだ(107)。

（§149）彼らの中には、アサド・ブン・フザイマ族（Banû Asad b. Khuzayma、フザイマの子アサド族）に属する、ウバイド・アッラーフ・ブン・ジャハシュ・アル＝アサディー（'Ubayd Allâh b. Jahsh al－Asadî、アサド族のジャハシュの子ウバイド・アッラーフ）もいる(108)。彼には、アブー・スフヤーン・ブン・ハルブ（Abû Sufyân b. Harb、ハルブの子アブー・スフヤーン）の娘ウンム・ハビーバ（Umm Habîba）[という妻]がいた(109)。それはアッラーの使徒が彼女と結婚する前のことであった(110)。ウバイド・アッラーフは諸啓典を読み、キリスト教に傾倒し

ていた。そして聖預言者が遣わされた時、ウバイド・アッラーフは妻のウンム・ハビーバと共に、ムスリムたちに加わって、アビシニアの地に移住した(111)。その後、かの地でイスラームから離れ、キリスト教徒になり、客死した(112)。彼はムスリムたちに「我々は目を開けた。あなた方は目を開けようとした」と言っていた。つまり、我々ははっきりと見たが、あなた方は見ることを求めているという意味である。これは彼が彼らにつくった諺であり、[元来は]犬に対して、犬が生まれた後で両眼を開けた時、「目を開けた」と、また犬が両眼を開けようとしたが、両眼がまだ開かなかった時、「目を開けようとした」と言われたのである(113)。ウバイド・アッラーフが死んだ時、アッラーの使徒はアブー・スフヤーンの娘ウンム・ハビーバと結婚したが、それはネグスが彼女をこの使徒と結婚させ、この使徒に代わって400ディーナールの婚資を彼女に出したことによる(114)。

(§150) 彼らの中には、'修道士バヒーラー'もいる。彼はキリストの教えを信じていた(115)。バヒーラーはキリスト教徒たちの諸書の中では、セルギウス(Sarjis)と呼ばれるが、アブド・アル＝カイス('Abd al－Qays)族に属していた(116)。聖預言者が12歳で、父方のおじアブー・ターリブと共に、アブー・バクル、ビラール(Bilāl)を伴って、商売のためシリアに出かけた時、彼らはバヒーラーのそばを通った(117)。その時、バヒーラーは自分の庵にいたのだが、聖預言者が分かった(118)。この預言者の特質と諸徴、更には自分の諸書の中にあったことによって分かったのであった(119)。また、この預言者がどこに座ろうと、雲がこの預言者を覆うのを見た。バヒーラーは彼らを泊め、彼らに敬意を示し、彼らのために食事を作った。更には庵から降りて来ると、聖預言者の両肩の間に預言の封印を見て、自分の片手をその場所に置き、聖預言者を信じた(120)。そしてアブー・バクルとビラールに、この預言者の話とこの預言者に起こるであろうことを知らせ、アブー・ターリブには、今進んでいる方向から聖預言者を連れて引き返すよう求めた(121)。また彼らに啓典の民からこの預言者を守るよう注意を促し、この預言者の父方のおじアブー・ターリブにそのことを知らせた(122)。そこでアブー・ターリブはこの預言者を連れて引き返したが、その旅から戻った時に、この預言者とハディージャとの話が始まることになり、アッラーは彼女にこの預言者が預言者であることの諸徴を明かし給い、この預言者に旅の途中で起こったことを彼女はアッラーによって知らされた。

(§151) マスウーディーは言った。これらが被造物の始めから我らが到達したところまでの要約である(123)。我らはアッラーの諸法がもたらし、諸啓典が語り、使徒たちが明らかにした事柄以外の物事を混ぜなかった(124)。アッラーが望み給うならば、そしてアッラーこそ万物が御助けを求めるお方であらされるが、我らはアッラーの法に従う人たちの諸書に見いだしたところに従って、これから、インドの諸王国の始まりと、それら諸王国の思想に関する概略とを述べるであろう(125)。その後に、その他の王国の叙述を行なうが、イスラエル人諸王に関する叙述の要約は既に行なっている。

注

略語表

イブン・クタイバ：Ibn Qutayba, *Kitāb al−Ma'ārif*, ed. Tharwat 'Ukāsha, Cairo, 1960

ヤアクービー：al−Ya'qūbī, *Ta'rīkh* ed. M. Th. Houtsma, 2vols., Leiden, 1883

タバリー：at−Tabarī, *Ta'rīkh ar−Rusul wa'l−Mulūk*, ed. M. J.de Goeje et al., 13 vols., Leiden, 1964〜65,

ヤークート：Yāqūt, *Mu'jam al−Buldān*, 5vols., Beirut, 1955〜57

E I² : *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, ed. H. A. R. Gibb et al., Leiden, 1960〜

本章の原文では、預言者ムハンマドを指す、ムハンマド、聖預言者（その預言者）、アッラーの使徒、という名詞に、−アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを−という表現などが後置する。また、アッラーには、−至高にして至大におわす−ほかの表現が付くことが多く、尊敬される人物には、−彼の上に平安あらんことを−などが付くことがある。本訳文では、煩雑さを避けるため、こうした表現を割愛し、注記するにとどめる。

（1）'Abd al−Hamīd版では、"マスウーディーは言った"が欠けている。

（2）"ムハンマド"に、"−アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを−"が付いているが、'Abd al−Hamīd 版では、"キリストとムハンマド"に、"−アッラーが彼ら二人に祝福と平安を与え給わんことを−"が付いている。一神教徒(Ahl at−Tawhīd)とは、一般にハニーフ(hanīf、純正な教えに従う者)と呼ばれ、ユダヤ教とキリスト教より前のアブラハムの教えに従う者たちである。こうした人たちを、イブン・クタイバは"預言者[ムハンマド]が遣わされる前に[真の]宗教を持っていた者"と表現し(p.58)、Ri'āb b.al−Barrā'、Waraqa b. Nawfal、Zayd b. 'Amr b. Nufayl、Umayya b. Abī as−Salt ath−Thaqafī、As'ad Abū Karib al−Himyarī、Quss b. Sā'ida al−Iyādī、Abū Qays Sirma b. Abī Anas、Khālid b. Sinān b. Ghayth という8名について記述する(pp. 58〜62)。

（3）"預言者たちが含まれている(彼らの中には預言者たちがいる)"が、'Abd al−Hamīd版では、"預言者たちである(彼らは預言者たちである)"となっている。

（4）'Abd al−Hamīd版では、"アッラーの友"が欠けているが、"アブラハムの子イシュマエル"の後に、"−アッラーが二人に祝福と平安を与え給わんことを−"が付いている。ラッスのともがらは、クルアーン（25:38と50:12）には、ヌーフ（ノア）の民、アード、サムードなどと同様、使徒たちを嘘つき呼ばわりした結果、アッラーによって壊滅させられたとある。

（5）"Qadmān"が、'Abd al−Hamīd版では、"Admān"と読まれている。

（6）'Abd al−Hamīd版では、"アッラー"の後に、"−至高にして至大におわす−"が付いている。彼らは自分たちの預言者ハンザラを井戸(rass)の中に沈めた(rassa)（あるいは井戸に吊るした）'井戸のともがら'とも言われている。また、Ch. Pellatによれば、クルアーン22:45にある「見捨てられた井戸と高殿はどれほどであったか」をめぐって次のような解釈がある。ラッスのともがらは彼らに十分な水を供給する井戸をアデンの近くに持ち、公正さをもって彼らを治め、彼らの幸福を保証する王を戴いていた。ところがこの王が死んだ時、サタンが王の死体に入り込み、王が自分は死んでないと宣言するように見せかけたため、人々はサタンに促されて王の死体を防腐保蔵し、サタンが覆いで隠すよう命じたこの偶像を崇め始めた。アッラーは彼らにサタンの欺きを暴露しサタン崇拝を止めさせるために預言者ハンザラ・ブン・サフワーンを遣わしたが、彼らはハンザラの言うことを信じず、彼を殺してその井戸の中に投げ込んだ。まもなくアッラーの懲罰が下り、彼らは滅ぼされ、彼らの地はジン(注86参照)や野獣に引き渡された[Hanzala b. Safwān, *E I²*, vol.III, p.169]。なお、ハンザラは、後述(注41)のハーリド・ブン・スィナーンと同様、伝説上の巨鳥アンカー('Anqā')を呪って、絶滅に導いた人物と言われることが多い。

（7）"イスラエル人のユダ族に属する一人の預言者"が、'Abd al−Hamīd版では、"イスラエル人の預言者たちの中でユダ族に属する一人の預言者"となっている。ユダ族のこの預言者は、下記のネブカドネッツァル(一般に新バビロニア帝国第2代の王、在位B.C.605〜562)との関係を、聖書(列王紀下24〜25、歴代志下36:5〜21、エレミヤ書21:2,7;39〜52、エゼキエル書26:7;29:18)に沿って考えると、エレミヤを指して

いるのかも知れない。勿論、聖書ではネブカドネッツァルが進んだのはエルサレムやツロである。

(8) “アッラー”に、“－至高にして至大におわす－”が付いている。引用部は、クルアーン21:12とクルアーン21:15だが、'Abd al－Hamīd版では、それぞれ「我らの威力を知ると」と「刈り入れの穀物のようにして絶滅させて」となっている。

(9) “彼らへの彼の哀歌”が、'Abd al－Hamīd版では、“彼への哀歌”となっている。ヒムヤルは、次文に登場するカフターン――南アラブ系部族の始祖とされる――の曾孫サバ(Saba')の子ヒムヤルを父祖とし、Zufār(在イエメン北部)を首都とする王国を築いた。この王国は、後述(§130)のズー・ヌワース王の時、アビシニア軍の侵攻を受け、実質的に滅亡した。

(10) “ダルア(Dar')”が、'Abd al－Hamīd版では、“ザルア(Zar')”となっている。アブー・ダルアは、ラアウィールとカドマーンと共にラッスの民を形成する部族とされている。

(11) ワハブ・ブン・ムナッビフ、すなわちAbū 'Abd Allāh Wahb b. Munabbih は、南アラビア出身の歴史家で、旧約聖書の創世記に準じる内容を持つ、通常 al－Mubtada'『創始』と呼ばれる書物や、預言者ムハンマドの軍事遠征記(maghāzī)などを著し、イブン・クタイバ、ヤアクービー、タバリーをはじめ、多数のムスリム歴史家の情報源となっている。728～29年或いは732～33年没。

(12) ズー・アル＝カルナイン、文字どおりは'双角の主'を意味する人物は、クルアーン(18:83～98)では、太陽の沈む所、太陽の昇る所に達し(85～91節)、二つの堰の間では、ヤアジュージュとマアジュージュ（ゴグとマゴグ）に対して鉄と銅で防壁を築き(92～97節)、太陽の沈む所の民にアッラーの懲罰と報酬について話した(87～88節)、すなわちアッラーを信じる者であった。'Abd al－Hamīd版では以下、“キリスト”の後に、“－彼の上に平安あらんことを－”が付いている。

(13) 以上、イブン・クタイバにも、ワハブが言ったとして、同様な記事がある(p.54)。但し、ズー・アル＝カルナインはアレクサンドリア(al－Iskandarīya)出身で、名はアレクサンドロス(al－Iskandarūs)となっている。タバリーは2名のズー・アル＝カルナインを挙げ、前の者はアブラハムの友であり、ベルシェバ(Bi'r as－Sab')においてアブラハムの井戸を決定した者(I,pp.225,414)、後の者はアレクサンドロス(I, pp. 201, 692)としている。

(14) “多くの”が、'Abd al－Hamīd版では、“大きな”となっている。『時代の情報の書』と『中間の書』は、いずれもマスウーディーの歴史書であり、詳しくは拙稿「マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって（1）」『大阪外国語大学論集』第4号(1990) pp.288～89を参照。

(15) 本書の第25章であり、ズー・アル＝カルナインに関して、彼が地の端々に達したので、カーフ(Qāf)山を預かる天使によって、ズー・アル＝カルナインと呼ばれたのだと考える者や、彼が黄金でできた二つの髪留めをしていたからだと考える者がいる(§671)とある。

(16) 洞窟の人々は、クルアーン(18:9～26)では、'洞窟の仲間たち'と呼ばれており、アッラーへの信仰を守るために洞窟に逃れた青年たち(10,16節)が、この洞窟の中でアッラーによって耳を聞こえなくされて(11節)眠ってしまい(18節)、自分たちにはせいぜい1日と思えた(19節)309年に及ぶ(25節)眠りから目覚めた時(19節)、その一人に彼らの[古い]貨幣を持たせて町で食べ物を買ってきてもらおうとする(19節)という話になっている。マスウーディーも別の箇所(§746)では、こうしたクルアーンの記述を一部、引用しており、更には、彼らがルーム(ビザンツ帝国領)の地のエフェソス(Afsīs)の町の人々であったと述べている。この洞窟の仲間たちの話は、キリスト教徒の『エフェソス(Ephesus)の7名の眠り人』という4世紀の伝説に由来すると考えられる。

(17) イブン・クタイバでは、ワハブが言ったとして、洞窟の仲間たちはキリストより昔に洞窟に入ったルームの青年たちで、アッラーが彼らの耳を塞いでしまい、キリストが遣わされた時、彼は彼らの話を知らせたが、アッラーはキリストの後、預言者［ムハンマド］より前の期間に彼らを甦らせた(p.54)とあり、タバリーには、より詳細な諸説が挙がっている(I,pp.775～82)。

(18) 本書の第28章と第29章であり、洞窟の仲間たちはルームの王(ビザンツ皇帝)デキウス(Daqyūs)から逃れ(§729)、洞窟の人々はヴァレンス(Awālans)の時代に目覚めた(§746)、云々(注16参照)とある。因に、『エフェソスの7名の眠り人』伝説では、この青年たちは皇帝デキウス(Decius、在位249～51年)治下の迫

害で洞窟に逃れ、皇帝テオドスィウス(Theodosius、在位379～95年)――皇帝ヴァレンス(Valens、在位364～78年)の次――の時代に目覚めたとされる。

(19) “キリスト”に、‘Abd al－Hamīd版では、“－彼の上に平安あらんことを－”が付いている。Jirjīsは通常、ギリシア語のGeōrgios(ラテン語のGeorgius)のアラビア語読みであり、以下の話を4世紀初頭に殉教したとされる聖ゲオルギウス(イングランドの守護聖人セント・ジョージ)と関連づける説もある。

(20) ‘Abd al－Hamīd版では、アッラーが明示されておらず、主語(誰が彼を遣わしたのか)が不明瞭である。また、“アッラー”に、“－至高にして至大におわす－”が付いている。モースルは現在のイラーク北部にあるが、古代アッシリア帝国の首都ニネヴェとは、ティグリス川をはさんで向かい合う。

(21) “アッラー”に、‘Abd al－Hamīd版では、“－至高にして至大におわす－”が付いている。

(22) イブン・クタイバでは、Jirjīsはパレスティナ(Filastīn)の人で、使徒たちの何名かと同時代に生き、モースルの王へ遣わされた(p.54)とあるだけだが、タバリーでは、パレスティナ人の心正しい大商人で慈善家であり、最後の使徒たちと同時代に生き、モースルの暴虐な王ダキアヌス(Dādhānah)のもとに赴き、偶像崇拝を止めてアッラーを信じるように説いたところ、王は彼を拷問にかけて殺したが、アッラーが彼を生き返らせ、彼はアッラーを信じる者たちを増やしていき、これが3回繰り返された後、アッラーは不信者たちの上に火を降らせたので、彼は彼らに殺され殉教したが、火は町とその中の被造物すべてを焼き尽くした(I,pp.795～811)とある。

(23) 大工ハビーブはアンティオキアのSilpius山の下にある聖堂にその名を留める伝説上の人物であり、新訳聖書にエルサレムの預言者として登場するアガボAgabusの話(使徒行伝11章27～30節および21章10節以下)に似ているが、両者の関係は不明である。他方、クルアーン36章12節以下に、ある男が同胞の市民に使徒たちに従うように説いたが、殺されてしまったという話が記されており、ムスリムの伝承では、その都市はアンティオキア、その男はハビーブだと考えられることが多い。

(24) ‘Abd al－Hamīd版では、アッラーの後に“－至高にして至大におわす－”が付いている。

(25) 引用部はクルアーン36:15だが、次の§128に、より詳しい引用が見られる。

(26) “考え”が、‘Abd al－Hamīd版では、“述べ”となっている。

(27) ‘Abd al－Hamīd版では、“長い話”が“長い重大な話”となって、“奇跡と証し”が“奇跡と不思議な事柄と証し”となっている。

(28) ‘Abd al－Hamīd版では、“アッラー”の後に“－至高にして至大におわす－”が付いている。タバリーでは、以下のクルアーン36章、すなわちヤー・スィーン(Yā Sīn)章の男はアンティオキアの住人で、ハビーブ（あるいはHabīb b. Marī）と言い、絹職人であり、癩病にかかっており、身体も弱かったが、施しをする高潔な人物であった。使徒たちがアンティオキアで王アンティオクス(Antaykhus)と人々とによって殺されようとした時、彼は走ってやって来て、使徒たちに従うよう、そして偶像崇拝を止めてアッラーを信じるよう町の人々に説いたところ、殺された――アッラーは彼を楽園に入れる一方、アンティオキアの王と住民を滅ぼした――(I,pp.790～93)とある。尤も、前半部は、ハビーブは偶像を作る大工であったが、使徒たちの行なった奇跡を見て、偶像崇拝を捨てたとする説の方がムスリムの伝承では一般的である。

(29) ‘Abd al－Hamīd版では、“アッラー”の後に“－至高にして至大におわす－”が付き、“こうした彼らのこと”が、“こうしたこと”になっている。また、二つの引用部は、それぞれクルアーンの36:14と36:20であるが、‘Abd al－Hamīd版では、前が“「我らが彼らのもとに二人の使徒を遣わしたところ、彼らは二人を嘘つきだとした」”、後が“「町のはずれから一人の男が走って来た」”となっている。

(30) “柩”が、‘Abd al－Hamīd版では、“庫”となっている。

(31) 本書第28章であり、ペテロとパウロが殺されたのは、ルーム王クラウディウス(Qulūdiyus)の時代だった(§722)とある。‘Abd al－Hamīd版では、“キリスト”の後に、“－彼の上に平安あらんことを－”が、また、“本書の中でも”の後に、“アッラーが望み給うならば”が付いている。

(32) 坑(al－ukhdūd、ウフドゥード)のともがら(ashāb、すなわちsāhibの複数形)は、クルアーン(85:4～10)では、信徒たちを迫害したために火の中で殺されたとある。新約聖書のダニエル書第3章に登場する、火の

燃える炉の中に投げ込まれる3名のユダヤ人の話との関係が指摘されることもあるが、タバリー(I,pp.922～5)やマスウーディーの以下の記述にも見られるように、ユダヤ教徒のズー・ヌワース王によってナジュラーンのキリスト教徒たちが坑の中で焼かれたとされる事件を指すと解釈するのが一般的である。そして、イブン・クタイバ(p.637)やヤアクービー(I,p.225)は、この事件を記述する際、'坑のともがら'ではなく、'坑の所有者(sāhib)'という表現を使っており、これがズー・ヌワースを指すとしている。このズー・ヌワースに関しては、マスウーディーは次の§130までの記事に加えて、他の箇所(§§1006～07)において、Yūsuf Dhū Nuwās b. Zur'a b. Tubba' al－Asghar b. Hassān b. Tubba' Abī Karibは、Lakhnī'a Dhū Shanātir(後注33参照)の後の王になり、坑のともがらとの一件の後、イエメンに渡ってきたアビシニア人との長い戦争の末に、恥を恐れて海に身を投げるまで、60？年間――イブン・クタイバ(p.637)やヤアクービー(I,p.226)によれば、68年間――王位にあったと述べる。歴史上では、彼は523年の終わりにヒムヤルの王座に就いたらしく、以前からアビシニアと結び付いていたナジュラーンを攻めたが、525年5月、イエメンに侵攻してきたアビシニア軍によって殺されたようである。また、ナジュラーンは、今日のサウディ・アラビア南部にあり、当地に残る前イスラーム期の遺跡は、現在、ウフドゥード遺跡と呼ばれている。

(33) マスウーディーは他の箇所(§1006)において、Lakhnī'a Dhū Shanātirは、王家出身ではなく、男色に耽り、王家出身のズー・ヌワース――その危害が自身に及ぶことを恐れた――によって殺されるまで、30年間或いは29年間――イブン・クタイバ(p.636)やヤアクービー(I,p.225)によれば、27年間――王位にあったと述べる。タバリーはこの王をLakhnī'a Yanūf Dhū Shanātir (I, pp. 917～19)と呼んでおり、6世紀前半のヒムヤル王Lahay'at Yanūf(Lahay'a b. Yanūf)のことであろう(Sidney Smith：Events in Arabia in the 6th Century A.D., *BSOAS*, vol.XVI－3, 1954, pp. 456～57)。また、この後半部（ユダヤ教を・・・）以下、このセクションの最後の一つ前の文（すると・・・投げ込んだ）までは、イブン・クタイバにも、同様な記述が見られる(p.637)。

(34) 'Abd al－Hamīd版では、"キリスト"の後に"－彼の上に平安あらんことを－"が付いている。以下、このキリスト教徒虐殺事件は、523年のことと考えられるが、蔀勇造氏は523年11月24日前後とされている(「再びナジュラーンの迫害について－関係資料の再検討－」『東洋学報』68巻3・4号 1987年 pp.99～127)。

(35) 'Abd al－ Hamīd版では、"アッラ"ーの後に、"－至高にして至大におわす－"が付いている。

(36) "二人(彼ら二人)を"が、'Abd al－Hamīd版では、"彼女を"となっている。

(37) ズー・サアラバーン、すなわちDaus Dhū Tha'labān(或いはThu'lubān)はズー・ヌワース軍によるナジュラーン包囲が続いている間に、ナジュラーンを脱出し、ビザンツ皇帝ユスティニアヌスⅠ世――マスウーディーがここでカエサルと記す――のもとで窮状を訴えた。その結果、ユスティニアヌスの要請を受けて、アビシニア軍が525年5月に介入し、ズー・ヌワース軍を打ち破り、ネグスElla Asbahaはズー・ヌワースのかわりに同じヒムヤルのSumayfa' Ashwāを太守に据えた(M.R.Al－Assouad：Dhū Nuwās, *EI²*, vol. II, pp.244～45)。

(38) 前注にもあるとおり、アビシニア人は525年にヒムヤル王国を制圧した。"サイフ・ブン・ズー・ヤザン"が、'Abd al－Hamīd版では、"サイフ・ズー・ヤザン"となっている。サイフ・ブン・ズー・ヤザンは、ヒムヤル王家の出身で、6世紀にアビシニア人をイエメンから追い出すために奮闘した人物と言われている。15世紀以降、彼の活躍の場をイエメン以外にも拡大した民間伝承が登場してくる。マスウーディーは他の箇所(§1015～16)において、サイフ・ブン・ズー・ヤザンは海に乗り出し、カエサルのもとに救援を求めに行き、カエサルの門前に7年間留まったが、カエサルは「お前たちはユダヤ教徒で、アビシニア人たちはキリスト教徒だ。我らは信仰を同じくする者たちを敵にまわして、信仰を異にする者たちを助けることなどしない」と言って、救援を断ったので、サイフはキスラー・アヌーシルワーンのもとへ行き、助けを求めたところ、キスラーは助けを約束した、そしてサイフは死に、息子のMa'dīkaribがad－Daylamのサトラップであるwahrizの軍(ペルシア軍)と共に船でハドラマウトに至り、Wahrizは上陸後、船を燃やした、と述べ、§1018において、Wahriz軍がアビシニア軍を撃破したと続く。尤も、イブン・クタイ

バ(p.638)やヤアクービー(I,p.227)では、Wahriz軍と共にイエメンに戻り、Wahriz軍がアビシニア軍を撃破した後、王になったのは、サイフ自身とあり、こちらの方がムスリムの伝承では一般的である。そしてアヌーシルワーンとは、ササン朝の英主ホスロー１世(在位531～78年)のことで、歴史上、彼は570或いは575年頃、イエメンに遠征軍を派遣したと考えられる。

(39) 本書第43章であり、前述(注32と33)のズー・シャナーティル(§1006)とズー・ヌワース(§§1006～07)や、サイフ・ブン・ズー・ヤザン(§1015)と彼の息子(§§1016～26)の記事が見られる。また、ズーたちとは、ズーで始まる名前を持つイエメンの支配者たちを指す。なかでも、王の叙任権を持っていたヒムヤルの8名、Dhū Jadan、Dhū Hazfar、Dhū Khalīl、Dhū Muqār(Maqār)、Dhū Sahar、Dhū Sirwāh、Dhū Thu'lubān(Tha'labān)、Dhū'Uthkulānが有名である［O.Löfgren：al－Adhwā'，*E I* ²，vol. I, p. 195］。なお、'Abd al－Hamīd版では、"アッラーが望み給うならば、その場所で"が欠けている。

(40) "アッラー"に、"－祝福され、いと高くおわす－"が付いており、'Abd al－Hamīd版では、"－至高にして至大におわす－"が代わって付いている。更には、"御言葉(かれのお言葉)"に、'Abd al－Hamīd版では、"－至高にして至大におわす－"が付いている。クルアーンからの引用は、前が85:4、後が85:8であるが、"力強いお方、称えるべきお方"が、'Abd al－Hamīd版では、"彼らが彼ら(＝信者たち)を迫害したのは、ひとえに彼ら(＝信者たち)が、力強いお方、称えるべきお方、アッラーを信じたからである"となっている。

(41) 後半部はイブン・クタイバにも同様な記事が見られる(p.62)。またハーリドは、前述(注６)のハンザラと混同され、イシュマエルの子孫たちの間に現れた最初の預言者であるとか、ラッスのともがらの預言者であると言われることもある。なお、"聖預言者"に、"－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－"が付く。

(42) "それに入った"が、'Abd al－Hamīd版では、"それに立ち向かった"となっている。

(43) イブン・クタイバにも同様な記事が見られる(p.62)が、"兄弟たち"の代わりに"彼の民"となっている。また、＜＞は本校訂版がIbn Qutayba著Kitāb al－Ma'ārif(ed. F. Wüstenfeld, Göttingen, 1850, p.29)から補った箇所であり、'Abd al－Hamīd版にはない。

(44) 次文までイブン・クタイバにも同様な記事が見られる(p.62)。

(45) "アッラーの使徒"に、"－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－"が付く。"「言え、・・・永遠なる者」"は、クルアーン112章1～2節。

(46) 'Abd al－Hamīd版では、"アッラーいと高くおわす－が望み給うならば"が付いている。本書の来るべき箇所とは第62章であり、ハーリドはアブス族の預言者であり、アッラーにお願いして、彼らの子供たちを食うアンカー鳥を絶やしてもらう話(§1348)話や、イブン・アッバース(Ibn 'Abbās)が言ったとして、ハーリドがアッラーの使徒の到来することを知らせた者であることや、切り毛の驢馬が来たら彼の墓を掘り返せとの遺言を彼の子供たちが実行しなかった話(§§1349～50)などが記述されている。

(47) 以下、このセクション(§133)の終わりまで、イブン・クタイバにも同様な記述が見られる(p.58)。なお、前述した(注２)ように、リアーブはRi'āb b. al－Barrā'(アル＝バッラーアの子リアーブ)と呼ばれている。アブド・カイス族は、アブド・アル＝カイス('Abd al－Qays)族の方がより一般的だが、北アラブ（アドナーン）系のラビーア(Rabī'a)族に属する。すなわち、アドナーンの孫Nizārの子ラビーアの子孫のアブド・アル＝カイスを父祖と考える部族であり、バハライン（アラビア半島東部）を中心に住んでいた。シャンヌはアブド・アル＝カイスの孫に当たる。

(48) "アッラーの使徒"に、"－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－"が付く。'Abd al－Hamīd版では、"アッラーの使徒"が"聖預言者(その預言者)"となっており、"キリスト"に、"マリヤの子イエス－彼の上に平安あらんことを－"が付いている。前半部"アッラーの使徒・・・遣わされる前"は、イブン・クタイバにはない。

(49) イブン・クタイバでは、"前"が"少し前"とあり、"天から"が欠けている。修道士バヒーラーについては、後の§150を見よ。

(50) "聖預言者"にここでは、"－彼の上に平安あらんことを－"が付く。

(51) “露”が、‘Abd al－Hamīd版では、“wāsit(駱駝の鞍の前部？)”となっている。

(52) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。“聖預言者が遣わされる700年も前に”以降、このセクション(§134)の後半部“覆った最初の者である”までは、イブン・クタイバにも同様な記述がある(p.60)。

(53) アフマドとは、預言者ムハンマドのことである。

(54) “不可侵になし給うた”が、‘Abd al－Hamīd版では、“偉大になし給うた”となっている。イブン・クタイバでは、この詩句もアスアド・アブー・カリブの作とされており(p.559)、マスウーディーは§§1088～89において、トゥッバア(Tubba‘ 南アラビアの王の称号)・アブー・カリブがイラーク、シリア、ヒジャーズ、それに東方の多くを所有し、この一節を含むカスィーダ(長詩)を吟誦したと述べている。タバリーでは、第3代目のトゥッバア Tubān As‘ad Abū Karib b. Malikaykarib b. Zayd b. ‘Amr Dhī al－Adh‘ārはメディナにやって来て、ユダヤ教徒の聖職者2名をイエメンに行かせ、聖館を建ててそれに覆いを付けた者(I,p.910)で、後述するDhū Nuwāsの父親(I,p.918)とある。

(55) “ニザール”が、‘Abd al－ Hamīd版では“アド(Ad)”となっている。イヤード・ブン・ニザール・ブン・マアッド部族は、北アラブ系の祖アドナーンの子マアッドの孫を父祖と考える部族であり、マスウーディー(§§601～03,611)では、Sābūr b. Sābūr［シャープール3世(在位383～88年)？］と幾度も戦ったとあり、その時代にはイラークに移っていたらしい。イヤード族がメッカにこの代表団を送ったのは、629年のことである。

(56) 前半部はイブン・クタイバにも同様な記事が見られる(p.61)。“裁き人(hakam)”が、‘Abd al－Hamīd版では“賢者(hakīm)”となっている。

(57) “知識”が、‘Abd al－Hamīd版では“理性”となっている。

(58) アル＝アアシャー、すなわちAbū Basīr Maymūn b. Qays al－Bakrīは、放浪と酒の詩人として有名であり、629年没。

(59) ハッファーンはヤークート(vol. II, p.379)によれば、クーファ(al－Kūfa)の近くにあり、時々、巡礼者が通るが、ライオンのいる場所である。“吹く風で見えない”が、‘Abd al－Hamīd版では、“ねぐらにじっとしている”となっている。

(60) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(61) “アッラーがあの方に御慈悲を垂れ給いますように”は、物故者に言う表現である。ウカーズはアラビア半島西部、ターイフ(Tā’ if)とナフラ(Nakhla)との間にあったオアシスで、Dhū’l－Qa‘da月(太陰暦11月)の1～20日に開かれていた定期市で有名であった。‘Abd al－Hamīd版では、“海”が“星”、“星”が“海”、“私はアッラーに誓って言います”が“クッスさんは違反のない罪のない誓い方でアッラーに誓って言いました”、“なぜ、人々は行って戻らないのでしょうか”が“なぜ、私は彼らが行って戻らないのを見るのでしょうか”、“満足し（彼らは満足し）”が“彼らはその場所に満足し”となっている。

(62) “アブー・バクル・アッ＝スィッディーク”に、‘Abd al－Hamīd版では、“－アッラーが彼を喜び給わんことを－”が付いている。アブー・バクル・アッ＝スィッディークは初代正統カリフ(在位632～34年)である。

(63) “預言者”と訳したが、原文では、“彼”となっており、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付いていない。

(64) “老いも若きも（若い者たちも年老いた者たちも）”が、‘Abd al－Hamīd版では、“初期の者たちも後の者たちも”となっている。

(65) “アッラーの使徒”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(66) クッス・ブン・サーイダは、その雄弁さで特に有名な、半ば伝説上の人物である。ハニーフとされているが、ネストリウス派の主教であったとか、ナジュラーンのキリスト教徒たちと関わりがあったとか、いう説もある。また、長寿者と思われており、その寿命は180年説から700年説までである。

(67) 前半部“サイード・ブン・ザイドの父で”までは、イブン・クタイバにも同様な記述が見られる(p.59)。サイード・ブン・ザイドはムハージルーン(メッカからメディナへの移住者たち)の一人で、‘天国を約束

された10人'（al－ashara al－mubashshara）の一人と言われ、670～71年に死去した。ウマル・ブン・アル＝ハッターブは、第2代正統カリフ（在位634～44年）である。

(68) ヒラーはメッカの北東約6キロにある山で、ムハンマドがこの山の洞窟で最初の啓示を受けたとされ、現在、この山はJabal Nūr（光の山）と呼ばれている。

(69) イブン・クタイバでは、ザイドは、"偶像崇拝を嫌い、［真の］宗教を求めていたが、シャームでキリスト教徒たちに殺された。預言者は「彼は一人だけでウンマとして復活する」と言った"（p.59）とある。また、タバリーによれば、ザイドはアブド・アル＝ムッタリブ家から一人の預言者が出現するのを待っていると言い、その預言者への自分の挨拶をアーミル・ブン・ラビーア（'Âmir b. Rabî'a）に託し、アフマドという名を持つその預言者の身体的特徴や辿る道を具体的にこのアーミルに述べた（I,p.1144）が、アッラーの使徒ムハンマドの召命の5年前に死んだ（III,p.2321）とある。

(70) ガッサーン朝は南アラブ（カフターン）系アズド（al－Azd）族――カフターンの曾孫サバの子Kahlānの子？アズドを父祖とする――の一派が、6世紀頃、ビザンツ帝国の影響下にダマスカス周辺域などを拠点にして国家的形態をとったもので、彼らはキリスト教単性論派を奉じていた。この王朝は636年、ムスリム軍に征服されることになる。

(71) "の中に遣わされる"が、'Abd al－Hamīd版では、"の中から遣わされる"となっている。イブン・クタイバでは、ウマイヤは、"諸啓典を読んでおり、偶像崇拝を嫌った。一人の預言者が遣わされること、その時が近づいたことを人に知らせていた"（p.60）とある。

(72) 'Abd al－Hamīd版では、"諸天、・・諸天使、諸預言者を描写し、復活、蘇り、楽園、業火を述べ"が、"諸天、・・諸天使を描写し、諸預言者、復活、蘇り、楽園、業火を述べ"となって、"アッラーだけを称賛していた"が、"アッラー－至高にして至大におわすー－を称賛し、かれを唯一としていた"となっている。

(73) 前半部は、クルアーン52:23に基づく。

(74) 聖預言者に、－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－が付く。イブン・クタイバでは、ウマイヤは、"預言者ムハンマドの出現と彼に関する話を聞いた時、彼への嫉妬から不信者となった"、"彼の詩が神の使徒に朗唱された時、神の使徒は「彼の舌は信じたが、彼の心は不信であった」と言った"（p.60）とある。ターイフは、メッカの南東75マイルにあり、サキーフ族（注83参照）の本拠地である。

(75) "若者たちと共に"が、'Abd al－Hamīd版では、"若者たちの中で"となっている。

(76) "鳥（それ）が言う"が、'Abd al－Hamīd版では、"それがお前たちに言う"となっている。

(77) "ウマイヤは3杯目になった（3杯目がウマイヤに達した）"が、'Abd al－Hamīd版では、"順番が彼に達した"となっている。

(78) "恩寵に取り巻かれたのに、感謝に努めなかった者"が、'Abd al－Hamīd版では、"恩寵と称賛と感謝に取り巻かれた者"となっている。

(79) "その後"が、'Abd al－Hamīd版では、"あるいは"となっている。

(80) "長い白髪"が、'Abd al－Hamīd版では、"長い1日"となっている。また、"消え去るまでしばし続く"が、'Abd al－Hamīd版では、"その日々は結局は消え去る"となっている。

(81) ウマイヤ・ブン・アブー・アッ＝サルトはサキーフ族最高の詩人と称えられ、その一神教的内容の多くの詩で有名である。しかし、預言者ムハンマドとの和解を拒み、イスラームが圧倒的に優勢になるに及んでついにイエメンに遁れ、629～30年頃に没したと伝えられる。また、後述（注94）のウトゥバとShaybaとの従兄弟であり、バドル（注98参照）で戦死した彼らを含むクライシュ部族に対する追悼詩も有名である。

(82) イブン・ダアブ、すなわちAbū 'l－Walīd 'Îsâ b. Yazīd b. Bakr b. Da'b al－Laythî al－Madanîは、伝承や系図に詳しい語り部（râwî）、詩人であり、ヤアクービーや間接的にはタバリーなどの情報源となっている。787～88年没。アル＝ハイサム・ブン・アディー、すなわちAbû 'Abd ar－Rahmân al－Haytham b. 'Adî at－Tâ'îは、系図や地誌に通じた歴史家（akhbârî）として50以上の作品を著したとされ、イブン・クタイバ、ヤアクービー、タバリー他の情報源ともなっている。821～25年没。アブー・ミフナフ、すなわちAbû Mikhnaf Lût b. Yahyâ b. Sa'îd b. Mikhnaf al－Azdîは、伝承や系図に詳

しい歴史家で30以上の作品を著したとされ、タバリーの情報源ともなっている。774年没。ムハンマド・ブン・アッ＝サーイブ・アル＝カルビー、すなわちAbû 'n－Nadr Muhammad b. as－Sâ'ib b. Bishr al－Kalbîは、クルアーン解釈(tafsîr)をはじめとして、系図や歴史、詩など、幅広い学術分野に通じていた人物である。763年没。また、クライシュ族は、北アラブ（アドナーン）系のキナーナ(Kinâna)族――アドナーンの曾孫ムダル(Mudar)から5代目キナーナを父祖とする――の支族で、預言者ムハンマドの出身部族である。

(83) サキーフ族は、北アラブ（アドナーン）系ハワーズィン(Hawâzin)族――アドナーンの曾孫ムダルから6代目ハワーズィンを父祖とする――から出たと言われているアラビア屈指の強力な部族である。

(84) “かわいそうな”が、'Abd al－Hamîd版では、“身寄りのない”となっている。

(85) “脅えて逃げ去った”が、'Abd al－Hamîd版では、“散って行った”となっている。

(86) ジンは、アラビア半島では、イスラーム以前から、砂漠に出没して人間に危害を加え、時には人間の姿をとることもある霊的な存在と考えられていた。クルアーンの中では、アッラーが人間より前に(15:27)、煙の出ない火で造り(55:15)、クルアーンを聞く一群もおれば(46:29,72:1)、アッラーのご命令に顔を背けるのもいる(34:12)とされている。

(87) この箇所だけは、ウマイヤ自身が語る文体となっている。

(88) “彼らは・・・”が、'Abd al－Hamîd版では、“我々は・・・”となっている。

(89) 'Abd al－Hamîd版では、“そのため、メッカの住民の書き出しは『アッラーよ、汝の御名において』であった”が、“そしてウマイヤは『アッラーよ、汝の御名において』と書いた最初の者であった”となり、“イスラームが到来すると”が、“アッラー－至高にして至大におわす－がイスラームをもたらすと”となっている。

(90) イブン・クタイバにも同様な記述がある(p.59)。フワイリドをアブド・アル＝ウッザーの子アサドの子と明記しており、ワラカの父ナウファルとフワイリドとが兄弟であることがわかる。なお、本原文には、“聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(91) “聖預言者”にここでは、“－彼の上に平安あらんことを－”が付いている。'Abd al－Hamîd版では、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付いている。

(92) タバリーにも類似の記述が見られる(I,pp.1151～52)。但し、ワラカがアッラーの使徒に会ったのは御館（カアバ神殿）を巡っていた時とあり、ワラカの最初の発言“お前が信じて・・・確信を持て”がない代わりに、“お前は確かにこの民の預言者であり”の次に、“モーセのところにやって来た最大の＜秘密を分け合う者＞（天使ガブリエル）がお前のところにやって来たのだ”が加わる。なお、“聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(93) 2箇所の“聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。イブン・クタイバでは、上記(注90)の後に、ワラカは“偶像崇拝を嫌い、キリスト教徒になっていた。ハディージャが彼に預言者－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－のことを少し述べると、「モーセのところに来ていた最大の＜秘密を分け合う者＞が彼（預言者）のところにやって来る」と言った”(p.59)とあり、タバリーには、こうした内容がより詳しく記されている(I,p.1151)。また、ヤアクービーでも、ワラカはキリスト教徒になったアラブ人の一人として名前が挙がっている(I,p.298)。

(94) ウトゥバはムアーウィヤ(Mu'âwiya、ウマイヤ朝の開祖)の母方の祖父、すなわち、ムアーウィヤを生んだHindの父親で、ターイフに住む、アブド・シャムス('Abd Shams)族――クライシュ族の支族――の有力者であったが、バドルの合戦（後注98参照）で戦死した。ヤアクービー(II,p.36)やタバリー(I,p.1201)では、アッダースはウトゥバとその兄弟Shaybaとの従者(ghulâm)とある。

(95) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(96) “この預言者”は原文では“彼”である。“アッラー”に、'Abd al－Hamîd版では、“－至高にして至大におわす－”が付いている。

(97) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。タバリーには、アッダースがウトゥバとShaybaの命令で葡萄の入った皿を持ってアッラーの使徒のもとに赴くと、アッラーの使

徒はその葡萄を食べた後、アッダースに出身地と宗教を尋ね、アッダースが自分はキリスト教徒でニネヴェの者だと答えたところ、アッラーの使徒はヨナ(Yūnus)の町から来たのかと言い、アッダースがそれがどうしたのかと応じると、アッラーの使徒はヨナは私の兄弟で預言者であったし、私は預言者であると言った。そこでアッダースは自分の身体を折り、アッラーの使徒の頭、両手、両足に口づけをした(I,pp.1201～02)とある。

(98) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。バドルの日とは、ヒジュラ暦２年ラマダーン月17日或いは19日或いは21日（西暦624年3月13日或いは15日或いは17日）であり、この日、メディナの南西、バドルの地において、ムハンマド軍がイスラームを受け入れていなかったメッカのクライシュ族の軍を破った。ところが、ヤアクービーでは、アッダースはキリスト教徒であったが、ウトゥバとShaybaによってアッラーの使徒のところへ差し向けられ、アッラーの使徒の言葉を聞くと、ムスリムになった(II,p.36)とある。なお、ムスリムの伝承によれば、ニネヴェの人アッダースは捕虜となり、奴隷市場で売られて、ターイフに連れて来られ、ラビーアの２人の息子ウトゥバとShaybaのどちらか、或いは両者の持物になっていたらしい。

(99) ナッジャール族は、南アラブ（カフターン）系ハズラジュ(al－Khazraj)族――カフターンから18～20代目に当たるハズラジュを父祖とする部族――の支族である。アンサール（援助者たち）とは、メッカから逃れてきたムハンマドと彼の教友たちを受け入れた、メディナ在住のムスリムたちである。

(100) 以下、このセクション全体はサフールの節のくだり(“彼のために・・・サフールの節が下った”)を除いて、イブン・クタイバにも同様な記述が見られる(p.61)。但し、イブン・クタイバでは、この文の直後に“彼はキリスト教に関心を持ったが、その後、キリスト教を遠ざけた”が入っている。

(101) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(102) 引用箇所はクルアーン２章187節。サフールとは、ラマダーン月中、断食に入る前にとる飲食のことである。この飲食は夜半から日の出１時間半前ぐらいまでの間にとるのだが、この許容される最終時間は、黒糸と白糸が判別できる時点が目安とされる。

(103) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。“聖(その)預言者”が、‘Abd al－Hamīd版では、イブン・クタイバと同様、“アッラーの使徒”になっている。

(104) “慰めとなる友に会えればなあと説教しながら”が、‘Abd al－Hamīd版では、イブン・クタイバが記すカスィーダ（長詩）の冒頭と同様、“思いどおりの友に会わずにメッカで”となっている。また、この一節はタバリーにもアブー・カイスのカスィーダの冒頭として挙がっているが、そこでは“思いどおりの友に会えればなあと説教しながら”となっている(I,p.1247)。

(105) アウス族は、南アラブ（カフターン）系で、前記(注99)のハズラジュ族と兄弟部族とされており、共にメディナの主要アラブ部族としてアンサールを形成した。アムル・ブン・アウフ族は、このアウス部族の支族であり、アル＝アウスの子Mâlikの子アウフの子アムルを父祖とする。

(106) ガスィール・アル＝マラーイカは、預言者ムハンマドの教友で、625年３月、ムハンマド軍とメッカ軍との間に起こったウフド(Uhud)の戦いに参加し、Abū Sufyānをもう少しで倒すところだったが、戦死してしまった。彼の死を聞いて預言者は「天使たちが彼の埋葬の準備をしてくれるだろう」と叫んだので、‘天使たちに洗われた者’という名前で呼ばれるようになった。ジャーヒリーヤとは、イスラームを知らない状態をいい、ジャーヒリーヤ時代とは、本稿で扱う、イエス没後からムハンマドが布教を開始するまでの時代や、ムハンマドの時代に先行する約150年間を指す場合が多い。

(107) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。“この預言者”と訳した語は、原文では“彼”という代名詞である。アブー・アーミルは、ヤスリブ(Yathrib)でアウス族を率いていたが、預言者がヤスリブすなわちメディナにやって来ると、意見が対立するようになり、預言者を避けてアウス族の若者50名と共にメッカへ移り、ウフドの合戦ではメッカ軍の先鋒として、預言者軍と戦った［息子のハンザラは預言者軍として戦った］。その後、630年メッカが開場した日、ルームに出ていき、そこで没したと伝えられる。タバリーでは、ヒジュラ暦10年(西暦631～32年)に［ビザンツ皇帝］ヘラクリウス(Hiraql)のもとで没した(I,p.1740)とある。また、イブン・クタイバでは、アブー・アーミルは偽信

者として名前が挙がっている(p.343)。

(108) “ウバイド・アッラーフ・・・”が、‘Abd al－Hamīd版では、“アブド・アッラーフ・・・”となっている。アサド・ブン・フザイマ族は、北アラブ（アドナーン）系で、ムダルの曾孫フザイマの子アサドを父祖とする有力な部族であり、系図上は前記（注82）のキナーナ族と兄弟関係にある。

(109) ウンム・ハビーバは、本名Ramlaと言い、ウマイヤ朝の開祖ムアーウィヤの姉妹である。彼らの父親アブー・スフヤーン・ハルブは、前記（注94）のクライシュ部族のアブド・シャムス支族の長で、メッカの有力商人であった。

(110) “アッラーの使徒”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。

(111) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。“聖(その)預言者”が、‘Abd al－Hamīd版では、“アッラーの使徒”となっている。

(112) タバリーには、ウバイド・アッラーフは妻のウンム・ハビーバを自分に従わせようとしたが、彼女は拒否して自らの宗教を固守した(I,p.1772)とある。

(113) ‘Abd al－Hamīd版では、“生まれた”の後に、“それは犬の子である”が付いており、“両目が開かなかった”が、“両目を開けなかった”となっている。

(114) “アッラーの使徒”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。タバリーにも、この話がヒジュラ暦10年(西暦631～32年)の記述の中に挙がっている(I,p.1772)。なお、“ウバイド・アッラーフ”が、‘Abd al－Hamīd版では、“アブド・アッラーフ”となっている。ウバイド・アッラーフ・ブン・ジャハシュ・アル＝アサディーは、母親が預言者ムハンマドのおばUmaymaであった。彼と共にアビシニアへ移住した、彼の兄弟‘Abd Allāhはメッカに帰還し、メディナに移住したムハージルーンの代表的人物の一人である。

(115) “キリスト”に、‘Abd al－Hamīd版では、“マルヤムの子イエス－彼の上に平安あらんことを－”が付いている。

(116) “キリスト教徒たちの諸書”が、‘Abd al－Hamīd版では、“キリスト教徒たち”となっている。キリスト教徒の間では、アラム語のbehīrā(‘選ばれた’の意)から来たと考えられるバヒーラーをこの修道士の添え名とみなして、彼の名をSergiusとする説が一般的である。

(117) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。“聖(その)預言者”が、‘Abd al－Hamīd版では、“アッラーの使徒”となっている。アブド・アル＝カイス族については、注47を見よ。ビラールすなわちBilāl b. Rabāhは、アビシニア出身の奴隷であったが、アブー・バクル(注62参照)が買い受けて自由の身にしてやり、最初のムスリムの一人となった人物であり、最初のムアッズィン(礼拝の呼びかけ人)として有名であり、641年没。タバリーには、バヒーラーは［シリア南部の］Busrāにおり(I,p.1124)、アッラーの使徒はその時、9歳であった(I,p.1125)という説が挙がっている。

(118) “聖預言者”に、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。‘Abd al－Hamīd版では、“聖(その)預言者”が、“アッラーの使徒”となっている。

(119) 以下、このセクション(§150)の終わりまで、“この預言者”と訳した箇所は、原文では“彼”という代名詞であり、－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－が付いていない。‘Abd al－Hamīd版では、“自分(彼)の諸書”が、“彼の書”となっている。

(120) “聖預言者”には両方とも、“－アッラーが彼に祝福と平安を与え給わんことを－”が付く。‘Abd al－Hamīd版では、冒頭の“聖(その)預言者”が、“アッラーの使徒”となっている。

(121) “アブー・バクルとビラール”に、“－アッラーが彼らに満足し給わんことを－”が付いているが、‘Abd al－Hamīd版では、この表現が付いていない。タバリーにも、以上の出来事がより詳細に記されている(I,pp.1123～26)。

(122) 啓典の民とは、ここではユダヤ教徒とキリスト教徒を指す。

(123) “我らが到達したところ”が、‘Abd al－Hamīd版では、“我らが到達したこの場所”となっている。

(124) “使徒たち”に、‘Abd al－Hamīd版では、“－彼らの上に礼拝と平安があらんことを－”が付いている。

(125) “アッラー”に、“－いと高くおわす－”が付いている。‘Abd al－Hamīd版では、“アッラーが望み給

うならば”が欠けており、“アッラーこそ万物が御助けを求めるお方であらせられる”が、“アッラーこそ最もよく知り給う”となっている。

（1998．9．21　受理）